

【論文】

宮沢賢治と「苦の世界」—『フランドン農学校の豚』をめぐって

秦野一宏

1.

大正14年6月25日付、保阪嘉内宛書簡の中で、宮沢賢治は盛岡高等農林学校時代を振り返って、現在との心境の違いを次のように語っている。

「あのころはすきとほる冷たい水精のやうな水の流ればかり考えてみましたのにいまは苗代や草の生えた堰のうすら濁ったあたかなたくさんの微生物のたのしく流れるそんな水に足をひたしたり腕をひたして水口を繕ったりすることを願ひます¹⁾」。「すきとほる冷たい水精のやうな水の流れ」とは、まず真理ありきというゆるがぬ絶対的な確信に支えられ、理知一辺倒の観念の世界に嵌まりこんでいたことを述懐しての表現だろうか。

たとえば盛岡高農時代（「あのころ」）の書簡の一つで彼は述べている—「戦争は人口過剰の結果その調節として常に起るものに御座候²⁾」。これは、明らかにマルサスの『人口論』（1798年）を下敷きにした言葉である。人口が増えれば、その増加を抑えようとして貧困や飢饉、戦争、病気などの積極的妨げが自ずから起こる。このように考えれば、自分自身は傍観者として、苦しんでいる人々に対して罪や良心の痛みは感じなくてすむ。自然は本来、そういうふうにできているのだというわけだ。マルサスを論じたドストエフスキイの言（「悪霊ノート」）を借りて言うと、「科学の道德性」に寄りかかっていれば、心の平安が得られるということになる。

また、この時期にあつては、賢治は「法性」と（マルサスのような）「科学」が同じ結論に達していると見ていた。大正7年2月23日付の父に宛てた書簡で彼は言う。「戦争に行きて人を殺すと云ふ事も殺す者も殺さるゝ者も皆等しく法性に御座候 起是法性起滅是法性滅といふ様の事たとへ（先日も屠殺場に参りて見申し候）、牛が頭を割られ咽喉を切られて苦しみ

候へどもこの牛は元来少しも悩みなく喜びなく又輝き又消え全く不可思議なる様の事感じ申し候³⁾」。後の賢治からは、すべては科学の「公式」で説明され、もはや「神」は働かないといったペシミスティックな言葉が洩れることもあるが⁴⁾、この時点では、科学と「法性」の齟齬は感じていなかったようだ。しかしいくら、科学と「法性」が一致するといっても、牛が殺されるのを目の当たりにすれば、やりきれない感情は残る。普遍的な生きもの、普遍的人間は観念であって、実際には存在しない。生きているのはみな個である。戦争によって調節されるといっても、調節される個の感じる苦しみ、痛みは消えることなく、厳然としてあるのだ。

もちろん、戦争や屠殺の残酷さに関しては、大正6～7年の賢治もまた、科学や「法性」ですべてわりきれると考えていたわけではない。たとえば、軍隊生活について賢治は父親には、兵役志願の望みを反対されまいと、志願1年目は「極めて呑気なる」もので、「生活〔軍隊生活〕としては単純に有之、殊に人と人との関係等は只服従せしむる器械のみにて万事解決つく事に有之…⁵⁾」と悟ったような物言いをしてながら、同時に、その服従の生活がいかに辛いものであるかを想像せざるをえなかった。たとえば彼は、戦争に駆り出され、残酷な命令に従う自身の姿を次のように想像している。

「戦が始まる。こゝから三里の間は生物のかげを失くして進めとの命令が出た。私は剣で沼の中や便所にかくれて手を合せる老人や女をズブリズブリとさし殺し高く泣き叫びながらかけ足をする⁶⁾」(「アザリア」第5号)。ただ、これは、あくまで「老人や女」をしかたなく殺さざるをえない「私」の辛さを訴えたもので、死の恐怖に怯える「老人や女」の悲惨さに焦点が当てられているわけではない。

大正7年5月19日付、友人保阪嘉内宛の書簡では、再び屠殺の問題に触れ、こう書き記している。「又屠殺場の紅く染まつた床の上を豚がひきずられて全身あかく血がつきました。転倒した豚の瞳にこの血がパッとあかくはなやかにうつるのでせう。忽然として死がいたり、豚は暗い、しびれのする様な軽さを感じやがてあらたなるかなしいけだものの生を得ました。これらを食べる人ととても何とて幸福でありませうや⁷⁾」。さきの牛の屠殺とは違い、ここでは賢治の憐れみの感情が滲み出ている。同書簡にはまた、

「一切の生あるもの生なきもの始終を審に諦かに観察したら何か涙でないものがありませうや」とも記されている⁸⁾。しかし、こうした「観察」から生まれる憐れみは、屠殺される側になく<私>、高所にいる傍観者たる<私>から生まれるものではないだろうか。このような「観察」は、社会の底辺に<棲息する>ちっぽけな者たちを描き出す 19 世紀半ばのフランスやロシアの生理学ものの手法を思い起こさせる。生理学ものの書き手たちはこぞって、ちっぽけな人間たちのあるがままの姿を「科学的」に研究し、時にその哀れな生活に同情してみせた。

日本では、芥川龍之介が同じような方法で憐れみを誘う人々を描いた。たとえば『芋粥』（大正5年）という小説には、同僚から犬のような扱いをされていじめられている五位について、こう書き記されている。「彼等にいちめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない、彼等の知らない誰かが一多数の誰かが、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めてゐる⁹⁾」。これは語り手の言葉だが、五位の背後に彼と同じような「多数の誰か」がいると想像し、彼らを憐れんでいるのは、明らかに作者自身である。『毛利先生』（大正8年）でも事は変わらない。主人公の毛利先生は中学校の老いた英語の先生であるが、この先生を特徴づけるのは、繰り返し強調される「家畜のやうな眼」である。語り手である「私」は初めは、皆と同様、「家畜のやうな眼」をした禿げ頭の先生のみすぼらしい服装や学力を侮蔑し、その人格まで嘲っていた。しかしある時、先生のその「家畜のやうな眼」の中にある「何かを哀願するやうな表情」に心を揺すぶられ、喉のつまりそうな「金切声」の中に潜む「幾百万の悲惨な人間の声」の深刻さに気づくことになる。

賢治はしかしながら、このような傍観者的立場からの、上からの<憐れみ>に留まることはなかった。

書簡に豚の屠殺を書き記してから3年余り経って、賢治は『フランドン農学校の豚』という屠殺される豚の話を改めて書き起すことになる。これは、農学校で飼われていた<幸福な>豚ヨークシャイヤが、王の布告した家畜撲殺同意調印法に基づく死亡承諾書に無理やり押印させられ、<同意の上で>、殺される話である。豚なのだから食用として殺されるのはあた

りまえだと言えはあたりまえだが、「審かに諦かに観察したら」いかにも哀れな話である。しかし、いくら観察をして憐れんでみても、所詮、豚の気持ちは人間にはわからない。であれば、「まことに豚の心もちをわかるには、豚になって見るより致し方ない¹⁰⁾」。賢治はこうして、豚ヨークシャイヤの心の内を想像する語り手を物語の中心に据え付けることにした。

このなりかわる（「なって見る」）という発想は、なにやらゴゴリと似ている。自身の伴侶にも比べられる大切な新調外套を盗まれた夜、アカーキイ・アカーキエヴィチ（『外套』）はどのような思いで過ごしたのか。語り手は言う。それは「多少なりとも他人の置かれた立場（положение＝状況、境遇）を想像することのできる人たちの判断に任せることにする¹¹⁾」と。すでに触れた芥川の『芋粥』と『毛利先生』は、いずれもゴゴリの『外套』を下敷にした小説だが、芥川は五位や毛利先生になりかわってその心の内を想像することはない。彼にとって五位や毛利先生はあくまで、読者に披露すべき＜知見＞を汲みとるための観察の対象にすぎなかった。

さらに『芋粥』、『毛利先生』、『外套』、『フランドン農学校の豚』と、こう並べてみると、その主人公のちっぽけさの度合いにおいては、賢治の豚ヨークシャイヤが一番である。五位、毛利先生は他からまったく顧みられないちっぽけな人間で、まさに家畜のような人間として登場する。アカーキイは「きわめてありふれた蠅をピンでとめて、顕微鏡でのぞいてみねばきがすまないような、生物学者の注意すら引くことができなかった人間」であると、度外れにその小ささが強調されているが、いくらちっぽけでも人間は人間である。宮沢賢治は、『フランドン農学校の豚』において、この家畜のような人間という発想を逆転させて、「人間語」を話せるようになった、人間のような家畜を描き出した。結果、賢治は「寓話」という形で、これまでの文学になかったほどのちっぽけなもの、すなわちコンマ以下、人間以下の＜人間＞（あるいは生きもの）の悲惨さを示すことになった。あるいはこの人間以下の＜人間＞に自意識が芽生えれば、「おれはひとりの修羅なのだ」（「春と修羅」）という、賢治に特徴的な自己認識が生まれてくるのかもしれない。

2.

「まことに豚の心もちをわかるには、豚になって見るより致し方ない」。とはいえ、豚になりかわって想像するのは、けして易しいことではない。『フランドン農学校の豚』の語り手は言う。「最想像に困難なのは、豚が自分の平らなせなかを、棒でどしやっとやられたとき何と感ずるかということだ。さあ、日本語だろうか伊太利亜語だろうか独乙語だろうか英語だろうか。さあどう表現したらいいか。さりながら、結局は、叫び声以外わからない。カント博士と同様に全く不可知なのである」。

この豚の痛みと「叫び声」については、『ビヂタリアン大祭』（大正12年頃）のアンチ・ベジタリアンを標榜するシカゴ畜産組合の撒いたビラにこう記されている。「殺す前にキーキー叫ぶのは、それは引っぱられたり、たゝかれたりするからだ、その証拠には、殺すつもりでなしに、何か鶏卵の三十も少し遠くの方でご馳走をするつもりで、豚の足に縄をつけて、ひっぱって見るがいゝやっぱり豚はキーキー云ふ¹²⁾」。つまり「叫び声」は刺激への単なる反応で、声はあてにならない。「全体豚などが死というような高等な観念を持っているものではない」というわけだ。この発言は、「元来少しも悩みなく喜びなく又輝き又消え全く不可思議なる様」と牛の屠殺を評した、大正7年の賢治の言葉との類似性を感じさせる。興味深いことに、同じく大正7年に賛同していたマルサスの『人口論』は、自分たちの主張のためにアンチ・ベジタリアンの援用するところとなる。すなわち「等差級数的に増加するだけ」の食料品に比べ、人口は「等比級数的に多くなる」とする『人口論』は、「世界の食物の半分を奪はうと企て」ているベジタリアンたちへの批判に使われることになる¹³⁾。おそらく賢治自身、意識的に、自身のかつての考えをアンチ・ベジタリアンたちに投影させているのだ。このように自身の過去（あるいはかつて書いたもの）を新たな視点から回顧し、新たな作品として再構成してゆくのは、賢治に特有の創作方法であると言っていい。『銀河鉄道の夜』に代表される度重なる改作や、はるか昔の青春時代のものに手を加え、題材として利用した晩年の「文語詩」制作などはその典型的な例になるだろう。そこには、「永久の未完成」こそ

が「完成」であるとする＜推敲＞の思想が底流している。

話を元に戻そう。アンチ・ベジタリアンたちからすれば、豚は「消化吸収排泄循環生殖」する「器械」にすぎない。彼らが撒いたビラでは、ベジタリアンたちを批判してこう主張されていた。「[ベジタリアンたちは]自分が死ぬのがいやだから、ほかの動物もみんなさうだらうと思ふのだ。あんまり子供らしい考である¹⁴⁾」と。ここには宮沢賢治の＜新たな＞世界を考えるための大きなサゼッションがあるのではないか。自分がいやだから、動物もそうだろうと思う、この「子供らしい考」こそ、大正7年にはなかった宮沢賢治の新たな考えである。頼るのは最終的には自分しかない。理性、世間知ではなく、自分の感情を、すべてのよりどころとする（このような考え方は彼のいう「心象スケッチ」にも通じる）、—それを「子供らしい」、幼稚な想像として退けるか、子どもにこそ、世界の実相が見えると考えるか、そこに大きな分かれ道がある。豚が死というような「高等な観念」をもっているかどうかは、わからない。この＜わからない＞が原点なのだ。賢治は、わからぬ「叫び声」から、＜他人＞の痛み、苦しみを想像する。どんな苦しみも＜わかる＞、「みんな自分の中の現象ではないか¹⁵⁾」と嘯いていた過去の面影はここにはない。

要はすべて＜なりかわった＞想像の世界の出来事なのである。豚がどう思っているか、熊が何を考えているか、ほんとうのところは分かるはずもないが、しかし分かるような気がする。この揺れの中で、フランドンの豚の物語は進行する。このような語り手の内面の揺れは『なめとこ山の熊』でも変わらない。『なめとこ山の熊』の語り手は告白する。「ほんたうはなめとこ山も熊の胆も私は自分で見たのではない。人から聞いたり考へたりしたことばかりだ。間ちがってゐるかも知れないけれども私はさう思ふのだ¹⁶⁾」。ここでいう「考へる」とは想像することに等しい。動物の言葉、あるいは動物と人間の会話はこの「私」の「間ちがってゐるかも知れない」想像から生まれる。

もちろん想像するためには、なんらかの共通するものがなければならない。おそらく賢治には過去に、豚の体験と共通する体験があったのだろう。若き日の賢治にとっては、進学も恋愛も、自分の自由にはならなかったし、

何をするにも、父たちの顔色を窺わねばならなかった。加えて、宮沢家の長男としての責務が賢治の肩に重くのしかかる。中村文昭は、このような若き日の鬱々とする賢治と、農学校の校長から、恩知らずだ、犬猫以下だと罵倒され、死亡を承諾することを証する書類に爪印を押さざるを得なくなった豚を重ね合わせて、こう述べている。「親、祖父の希望（質屋を継ぐこと）にさからうことは『犬猫にさへ劣ったやつ』であることをかれ〔賢治〕は知らされた。しかしかといってこれらの希望をうけいれることは、死亡証書に爪印をおすことだ」¹⁷⁾。もちろん過去の体験の一つひとつが、豚の物語の中の出来事と対応しているわけではない。ここで重要なのは、豚の物語に見られる賢治の過去の反映ではなく、「修羅」としての自己認識の芽生えでもなく、賢治が自身を「つらい」豚の気持ちを自身の「つらい」体験によって想像することができたという単純な事実そのものである。のちに賢治は「雨ニモマケズ手帳」に書き記している。「わが胸のいたつき これなべての人また生けるものの苦に透入するの門なり¹⁸⁾」と。自身のつらさによって他人のつらさを推し量ること、それがまさになりかわる>ことの本質ではないか。真に苦しむ者になりかわることができること、—それこそが賢治の理想となる。もしもそのようななりかわりが可能であれば、自分が豚であろうが、修羅であろうが、はたまたデクノボウであろうが、そのこと自体に大きな意味はない。

ここで問題となるのは、なりかわりによって感得された想像世界の<つらさ>をいかに読者に伝えればよいのかということである。

食肉として運命づけられたこのフランドンの豚の運命は苛酷である。豚は「つらい、つらい」と何度も繰り返す。よだか（『よだかの星』）や梟の僧侶（『二十六夜』）のいうつらさは、自分が被害者であると同時に加害者になってしまっているという負い目に由来するが、この豚はただもう一方的に虐げられていると感じるだけである。ここには文語詩「黄昏」の「屠殺士」加吉のような、屠殺される動物に幾分かでも罪の意識を感じる人間も登場しない¹⁹⁾。しかし、その救いのない「苦の世界」を語る語り方は、豚の痛みは「カント博士と同様に全く不可知なのである」などという物言いからもわかるように、総じてユーモラスなものである。井伏鱒二は、岩

屋に閉じ込められた山椒魚（『山椒魚』昭和4年）の＜悲劇＞をとぼけ顔の誇張法で描き出したけれども、フランドンの豚の描き方も同じようなとぼけたものである。小沢俊郎はその文体を、「溺れればわめきたくなるようなつらさ」を包み込むオブラートのようなものと見做した²⁰⁾。つらいからそれをユーモアでなんとか抑える。作者である賢治の感情はあるいはそのようなものだったかもしれないが、書く側ではなく読む側に立てば、このとぼけた語りにはさらに重要な役割があることがわかる。

とぼけ顔はなににより、知識人であることを自負するような知的な語りを拒否する。とぼけた語りは、笑いによって読者を観察者の高みから引きずりおろし、同時に、ちっぽけな登場人物（あるいは動物）の感じていることを、読者が共有できるように翻訳して伝えることを可能にする。

たとえば、豚が「つらさ」を感じる前、幸福な気分を味わっている豚の姿を語り手はこんなふうに伝えている。

「尤も豚の方では、それ〔金石でないものなら何でも食すること〕が生まれつきなのだし、充分になれてゐたから、けしていやだとも思はなかつた。却つてある夕方などは、特に豚は自分の幸福を、感じて、天上に向いて感謝してゐた」。

「天上に向いて感謝」するなどというのは、繰り返される「大学生諸君」という講演を想わせる呼びかけとあいまって、いかにも芝居がかった調子を作りだす。しかし、毎日同じような日常をくりかえす豚のちっぽけな世界にあつて、ほんのちょっとしたことが、豚にとってとてつもなく大きな意味を持つのだ。そのことを、この大仰な調子が伝えてくれる。

このような誇張は宇野浩二や、宇野が師と仰いだゴーゴリのものに近い（宇野やゴーゴリの小説でも「諸君」という呼びかけが多用されている²¹⁾）。たとえば『外套』の主人公アカーキイ・アカーキエヴィチは、浄書という仕事を気に入り、その仕事を家にまでもって帰って、ただもう自分の「満足のために」やっていた。眠る前には彼は、神さまは明日はいったいどんな浄書の仕事を授けてくださるのかと、明日のことを思いめぐらしながら

微笑に顔をほころばす。注意したいのは、えらい人の書いた書類を浄書するときは特に、張り切っていたということだ（文体や字の美しさは関係ない）。彼ができるのは浄書という機械的な作業だけで、表題を変えて一人称を三人称に直す仕事すらできない。ホンの少しでも創意工夫の必要な作業は、彼の手におえないのである。世界があまりにも小さすぎる。しかし、それは第三者から見てそうだというだけで、アカーキイにとって浄書は、まさにそれによって生きているといっても過言ではないほど大きなことなのだ。このアカーキイの小さな世界はフランドンの豚の小さな世界と似ている。豚の小さな世界の＜重大な＞出来事を読者に理解してもらうには、誇張によって拡大鏡で見るように表現するしかない。宇野浩二の表現を使えば、「ありのままの寸法」では見所がない、つまりありのままでは読者が感情移入できないために、とぼけ顔の誇張によって世界の寸法変えが行われているのだ²²⁾。さらに言えば、宇野の誇張法を使った代表作は『苦の世界』（大正8年）である。宇野の「苦の世界」もリアルに見れば、「溺れればわめきたくなるようなつらさ」に満ち満ちているが、その世界のちっぽけな住人たちはなにやらくさい芝居をしているように描かれる。あるいは豚の使う、豚にしては大仰な「苦の世界」という言葉の使い方も、宇野の小説に示唆されるところがあったのかもしれない。

3.

豚の味わったつらさを「不可知」のひと言で終らせず、豚になりかわって読者に伝えるためには、豚の「キーキー」叫ぶ声を言葉化する作業が不可欠である。その作業はそんなに難しくはない。豚自身が言葉を話すことができるという暗黙のルールを作品世界にもちこめばいいだけだ。しかし、宮沢賢治はそれ以上のことを考えた。彼の描き出す豚は単に言葉を話せる、人間とのコミュニケーションが可能だというだけではない。「豚は語学も余程進んでゐたのだし、又實際豚の舌は柔らかで素質も充分あったので」、「ごく流暢な人間語で」話せるようになったのだと語り手は言う。これは、動物が人間語を話せることがあたりまえのこととされている『どんぐりと山猫』、『なめとこ山の熊』、『セロ弾きのゴーシュ』、『山椒魚』のよ

うな世界のルールとはまるで違っている。賢治はこの豚の物語を「寓話」と呼んでいるが、ここでの擬人法はイソップ寓話で見られるようなものと同じようには扱えない。この『フランドン農学校の豚』という物語世界の暗黙の取り決めでは、動物はみな学習さえすれば、人間語を話す可能性がある。フランドンの豚はその中でも「素質」に恵まれていたこともあり、日々、語学の勉強に勤しんだのである。この条件付きの設定に賢治の真の独創性がある。

たとえ両親がともに外国人であっても、幼いころから日本で育ち、日本の言語環境の中で日本語を＜母語＞として獲得してゆけば、その人間の考え方は日本人化するものだ。豚の事情もそれと似ている。豚は人間語を獲得する過程で、無意識のうちに人間化してきたのだ。言い換えれば、豚は人間語の獲得とともに、自ずから人間と同じ精神世界を共有するようになった。が、いくら言葉を操れるからといっても、人間から見れば豚は豚のままで、どこまでも食用の家畜として扱われ続ける。人間的な意識・感情を持ちながら、人間以下、モノであることをまぬかれない。このような特異な豚の生きる世界はまさに、「苦の世界」にならざるをえない。「苦の世界」は、鞭打ちなどの身体的暴力だけに由来するものではないのだ。

同じように言語を話せるようになったといっても、「モンスター」と呼ばれるキャリバン（シェークスピア『テンペスト』）の場合は少し事情が違ふ。キャリバンの＜先生＞ミランダが手間隙かけて彼に言語を伝授したのは、野蛮な彼が「良い性質」になるようにと願ったからにはほかならない。一方、言語を教えてもらった「モンスター」（「野蛮人」）はミランダに感謝するどころか、次のような罵倒の言葉を浴びせかけた。「あんたは言語を教えてくれた、それで俺が得したことといやあ、どうやって呪うのかを俺が知ったってこと。赤い疫病でくたばりやがれ／俺におまえたちの言語を教えてくれたお礼にな！²³⁾」。このように教えられた言語に対して距離を保ち、その言語を異物として意識できるのは、教えた側のお仕着せがましき、教えられる側の性質にも原因があろうが、それだけではない。なにより、キャリバンにはもともと自分たちの言語（「早口のたわごと」）があったのだ。教えられた言語が＜母語＞でなく他人の言語、＜第2言語

>であったからこそ、キャリバンの精神世界は<人間化>（西洋化）する度合いがきわめて低かったのである。

西成彦は、西洋植民地主義批判の文脈の中で、ヨークシャイヤを『山男の四月』や『祭りの晩』の主人公、『なめとこ山の熊』の小十郎たちと一括りにして「キャリバン」と呼ぶ。この場合の「キャリバン」は住んでいた土地を力によって収奪され、迫害される原住民を示している。氏は、その西洋植民地主義批判の文脈の中で、『フランドン農学校の豚』で使われた「擬人法」の重要性を強調する。氏の言うとおりに、「農学校の校長から生徒までと家畜ヨークシャイヤのあいだの関係が、擬人法の使用によって、主人と奴隷、死刑執行人と死刑囚の対話的な関係にうつしかえられ²⁴⁾」ていることは確かであろう。『フランドン農学校の豚』は大ざっぱに言えば、罪なき豚が人間から言葉を与えられることで、むりやり人間とコミュニケーションをとらされ、人間との間の関係づけを強いられる迫害の物語に見えなくもない。しかし、ヨークシャイヤが言語を学ぶことを強制されたなどとはどこにも書かれていない。こと言語に関する限り、キャリバンの抱いているような不満など、ヨークシャイヤはまったく感じてはいない。それどころか、豚自身は言語を習得することや人間たちの知識を吸収することに喜びを感じていたふしがある。植民地主義批判の枠組みを超え、言語を主体的に学ぶという豚の立場から見なければ、こうした人間化した豚としての特徴の多くは見えなくなり、フランドンの豚が感じた「苦の世界」の内実の多くは消えてしまう。

「人間語」を話せるようになったヨークシャイヤは、人間を自身の仲間だと考え、人間一般に対する批判的な眼は持たない（あるいは持てない）。なにより、ヨークシャイヤは、言葉のあやではなく事実として、自身のからだを<人間のからだ>だと見なしている（「ひとのからだをまるで観透している」、「ひとのからだを枡ではかる」）。一方、語り手は豚になりかわりながらも、距離を置き、けっして豚を人間として扱わない。ヨークシャイヤの「一生」とは言ってもヨークシャイヤの「人生」とはけっして言わない。岡澤敏男は豚の犬座姿勢などを例にとり、このヨークシャイヤの豚としての行動にはリアリティがあり、賢治が豚の生態をよく研究していると

指摘しているが²⁵⁾、語り手は人間化した豚の内面を語りながら、境界を越えることなく、ヨークシャイヤをあくまでリアルな豚として突き離して見ている。豚の気分に触れた時も、語り手は次のように、人間との違いを強調した。「気分がいゝと云ったって、結局豚の気分だから、苹果のやうにさくさくし、青空のやうに光るわけではもちろんない。これ灰色の気分である」。

人間とは到底違うものであるにもかかわらず、その内面において、この豚はかなりの程度、人間に同化してしまっている。

豚は、自分が食われるために、餌をもらっているとは洞察できない。この豚は、畜産教師や助手が「飼料」と呼ぶものを「たべもの」と言い換える。豚は畜産教師や生徒たちの「やる」(＝殺す)という俗語の意味はよくわからなかったが、「飼料」という標準語はちゃんと理解できた(「やる前の日には、なんにも飼料をやっちゃいけない、やる前の日って何だろう」)。豚はあえて、「飼料」というような、自分の世界を家畜として規定しようとする<他人の言葉>には頬かぶりを決めこむ。さらには、教師と助手のことは、同輩あるいはそれ以下のものに用いられる一人称の「おれ」を用いて、二人は「おれにたべものをよこす」と表現する。この「おれ」は、生徒たちのことを考える時にも現れる(「一体おれと〔生徒たちの言っていた〕葱と、何の関係があるだらう」)。

『なめとこ山の熊』の小十郎と熊たちは、同じ人間と動物であるが、ここでは両者は、互いに殺す殺されるという関係にありながら、ざっくばらんに、互いに「おれ」と「お前」で会話をかわす。しかしヨークシャイヤの場合は、齟齬がある。たとえば、校長や畜産の教師は言わずもがな、助手でさえ、豚に対して<おれ - お前>の関係で接することは拒否している。

『なめとこ山の熊』では、殺される熊は、殺さざるを得ない小十郎の心の内を察していた。一方、『フランドン農学校の豚』では、助手は豚に鞭をふるいながらも、調子よくのんきに「チッペラリーの口笛」を吹いている。

「全体何がチッペラリーだ。こんなにわたしはかなしいのにと」と豚は口をまげる。この時に豚の口から、「この世は(…)苦の世界なのだ」という言葉が出てくる。「苦の世界」は文字通り、肉体的・精神的苦しみで満ちた

世界だが、ここではそれに加え、苦しみを察してくれる者のいない現実のことを指している。「苦の世界」では、真の対話は成立しない。マルティン・ブーバーの表現を用いれば、「苦の世界」の豚は「なんじ」と「それ」の間を揺れ動くのではなく、自身を「それ」としか扱ってもらえない固定した世界に属している。

一方、豚の側にも問題がないわけではない。助手からすれば、自分を同輩扱いし、「お前」と呼びかねない豚の態度は、生意気にしか映らない。

おそらくそうしたヨークシャイヤの人間に対する上からの目線を感じていたからこそ、助手は、＜尊大な＞豚を嘲笑い、あたかもご主人に仕えるような作り口調で、豚に言葉をかけたのだ。畜産教師、小使や生徒たちは豚のことを一様に「こいつ」と呼ぶが、助手だけはこんな言葉で豚に話しかける。「いかにで [] す、今日は一つ、お風呂をお召しなさいませ」、「さあ参りませう」、「今日少しご散歩なすっては」、一そしてこうしたわざとらしい敬語を使いながら、彼はそのたびごとに、お前の卑しい地位を知れとばかりにビシッと鞭をくらわせる。

しかし一方で、助手の豚に対するおどけた敬語の使用は、序列の下位に属する自身の不満の捌け口でもあった。上司である畜産教師には、彼はくまじめな敬語を使っていた。「肥育器はあったらう」と聞かれると、「はい、ございます」とかしこまって答える。校長は助手にとって直接話せないほどの恐れ多い上司である。畜産教師が助手に、校長が「こっちの方へ来たんだが」とざっくばらんな言い方で話しかけても、神妙に「はい、お入りのやうでした」と即座に敬語に言いかえる。つまりは助手は、敬語の海の中で汲々としつづける日頃の憂さを豚を相手に晴らしているのである。助手の下には小使がいる。上位にいる畜産教師は二人を同一視して、小使いと二人で豚のからだを洗うように指示を出す。助手は小使だけに洗わせ、手伝おうとはしない。助手は小使相手ならざっくばらんに、下卑た冗談も言える。豚を洗い終わったあと、豚がくしゃみをした時、小使は、風邪をひくのではないかと心配するが、助手は苦笑いしながら言う。「いゝだらうさ腐りがたくて」と。最終形で付け加えられた豚をモノ扱いする生徒たちの言葉も、豚の置かれた地位の低さを示すために一役買っている。

助手にとって校長は特別であったように、豚にとっても校長は別格である。校長からは「お前（もしくは「おまへ」）」と言われるが、豚は自分を「私」と呼ぶ。畜産の教師たちへの態度とは異なり、校長だけは、自分よりも上位にいる立派な「紳士」として扱っている。

人間語を解する豚はこうした組織のヒエラルキーに絡みとられる。言葉をはさめる豚は、自分を畜産教師や助手と対等、あるいはそれ以上の「第一流の紳士」のように思っているのだが、人間側から見れば、言葉など話せようが話せまいが、豚はあくまで人間以下のブタでしかないのである。この豚の苦しみの多くは、ブタがこのような序列ある人間関係に取り込まれることによって生まれる。

言葉を解すればこそ、豚は、自分がいると思っていた地位が違っており、自分が誰からも、人間以下の家畜扱いされていることに、だんだんと気づきはじめる。たとえば、教師や助手が自分を見る冷たい眼（「まるで北極の、空のやうな眼」）には何かしらの恐怖を感じるようになる。校長に対しても不安が募る。「校長さん、いゝお天気でございます」と豚が丁寧に挨拶をすると、校長は「黄色な証書」（死亡承諾書）を小わきにはさんだまま、ポケットに手を入れて、「にがわらひ」してこう言った。「うんまあ、天気はいゝね」。「豚は何だか、この語が、耳にはいって、それから咽喉につかえ」る。校長もなにやらじろじろ自分の体を見る。それは、同じく人間を見る眼ではない。将来の食べ物を見る眼である。しかし、よからぬことが起こりつつあるという予感はあるが、豚にはほんとうのところは分からない。ぶきみな言葉の意味がはっきりしない。

校長に対しては、組織の長として敬意を払い、特別視していたにもかかわらず、豚は、「第一流の紳士」どころか、人間として扱ってもらえない。それどころか、死亡承諾書に爪印を押すことを拒んだ時は、「お前もあんまり恩知らずだ。犬猫にさへ劣ったやつだ」と罵倒された。「第一流の紳士」だと思っていたのに、「犬猫」以下と見做されたことはショックだった。「どうせ犬猫なんかには、はじめから劣ってゐますよう。わあ」と、「悔しさ」や「悲しさ」がこみあげてきて、豚は「もうあらんかぎり泣きだした」。

しかしなぜ、ヨークシャイヤは豚でありながら、自分を「第一流の紳士」

などと思いこむことができたのか。ここにも彼の「人間語」を解する能力が関係する。言葉はヨークシャイヤを不幸に陥れるが、その一方で言葉を解すればこそ、彼は幸せな気分にも浸ることもできたのである。ある時豚は、化学をならった農学校の1年生の生徒のこんな言葉を耳にした。「ずいぶん豚といふものは、奇体なことになってゐる。水やスリッパや藁をたべて、それをいちばん上等な、脂肪や肉にこしらえる。豚のからだはまあたとへば生きた一つの触媒だ。白金と同じことなのだ。無機体では白金だし有機体では豚なのだ。考へれば考へる位、これは変になることだ」。白金と豚を同一視するこの言葉を、ヨークシャイヤは最大級のほめ言葉ととった。その理由はこうである。

＜人間通＞のヨークシャイヤは白金が1匁が30円することを、よく知っていた。体が白金と同じということは、白金1匁30円の相場から勘定して、20貫の自分は60万円になるなと＜彼＞は考えたのである。

ヨークシャイヤの人間社会に関する理解では、60万円という金額と等価なものはいくらでもあろうが、＜彼＞がすぐさま「第一流の紳士」を連想しているのはおもしろい（この場合、60万円はおそらく「紳士」の財産のことを言っているのだろう）。この伝でいくと、校長の価値は60万以上、その他の農学校の職員たちの価値は60万をずっと下回ることになるのだろう。『注文の多い料理店』では、二人の紳士はそれぞれの犬を失ったことを「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」とか「ぼくは二千八百円の損害だ」と、損失を金銭に換算して悔しがる。ヨークシャイヤの考えでは犬だけではない、どんな動物も人間も、みな金に換算できることになる。そして割り当てられた金の多寡で、位階ができる。

付け加えて言っておくと、60万円という計量化は、豚のものだが、いずれ豚自身が馬鈴薯なみに「七斗だの八斗だのと」枡で計られ、その値打ちを推し量られることになる。このような考え方は、「その身体は全体みんな、学校のお陰で出来たんだ」という校長の言葉とも繋がる。校長によれば、毎日「麦のふすま二升阿麻仁二合と玉蜀黍の、粉五合づつ」与えると豚の体ができあがるのだ。

豚ヨークシャイヤには、よだか（『よだかの星』）や蠅（『銀河鉄道の夜』）

のように、自分は被害者（弱者）であるばかりでなく、加害者（強者）でもあるというような認識の転換は起こらない。ここでは計量化することによって位階を作り、その上位に自分を置いていた豚自身が、逆に計量化されることで他からモノ扱いされる、その自他の認識の差が滑稽なカタチで露わになるだけだ。＜彼＞は、「ひとのからだを枡ではかる」だなんて、そんなふうに使われることは不当だ、「あんまりひどい」と抗議するが、その抗議によって滑稽さはさらに増す。

自分の価値を 60 万円と踏み、自分を「第一流の紳士」になぞらえる豚など、実際にはいるはずもない。しかし賢治は、このようないるはずもない豚を通して、現実的な人間を描き出した。『フランドン農学校の豚』の残された原稿には「寓話集中」とメモされていたが、物語はまさに人間を諷した「寓話」である。そしてこの「寓話」が読者に対してどれだけ説得力を持つかは、栗原敦の指摘するように、ひとえに「擬人化の成功」にかかっている²⁶⁾。しかしいったい、どう「擬人化」すればよいのか。賢治にとって、なにより重要なのは、いびつな人間の精神をあるがままに映し出すことであり、そのためにはどうにかして豚に人間的な内面をもたせる必要があった。とはいえ、無条件に言葉を話す豚を登場させても、それだけでは豚の仮面をかぶった人間ということになりかねない。

こうして、人間的な内面を作りだすため、豚と人間をつなぐために賢治が取り入れたのが、「人間語」の習得という出来事である。「人間語」の習得とともに、人間の考え方まで取り入れてしまった豚は、結果的に、人間どもの俗悪な姿を映し出す鏡になりえたのである。

4.

ある日、「幸福」な気分だった豚は、投げ込まれた自分の餌の中に豚の毛でできた歯磨楊子を発見し、嫌な「気分」になった。が、豚は歯磨楊子の意味するところを言語化して突き詰めることなく、なんとかやり過ごそうとする。これが豚の「つらい」毎日の始まりだった。その後、王の布告した家畜撲殺同意調印法に基づき、農学校の校長が豚に、死亡同意書に爪印を押すようにと働きかけてくる。この法律に関わるのは豚だけではないが、

賢治はあえて豚にスポットライトを当てる。その理由の一つは、牛や馬と違い、豚が人間たちから卑しめられていることにある。周知の通り、豚への偏見はもう世界中に拡がっている。豚に真珠という福音書の言葉からも窺えるように、豚は遠い昔から一段、見下げられてきた。それは残飯を食うからか、それとも食い太っているからか。あるいは『ビヂテリアン大祭』でアンチ・ベジタリアン派が性格づけているように、豚の生は「たゞ腹が空った、かぶらの茎、噛みつく、うまい、厭きた、ねむり、起きる、鼻がつまる、ぐうと鳴らす、腹がへった、麦糠、たべる、うまい、つかれたねむる、といふ工合に一つづつの小さな現在が続いて居るだけ²⁷⁾」だからであらうか。

『ビヂテリアン大祭』には、ベジタリアン穏健派のこんな考えも紹介されている。「もしたくさんのいのちの為に、どうしても一つのいのちが入用なときは、仕方ないから泣きながらも食べていゝ、そのかはりもしどうしてもその〔食べられる〕一人が自分になった場合でも敢て避けない²⁸⁾」。

一西成彦はこの言葉を受けて、次のように述べている。「このような悟りの可能性をも提示した宮澤賢治が豚にまで死亡承諾書の交換を要求した背後には、ニンゲンと非ニンゲンの対等を夢見る理想主義があったことはいうまでもない²⁹⁾」。ほんとうだろうか。

『フランドン農学校の豚』の初期形は大正11年冬から12年夏にかけて書かれ、最終形が出来上がったのは昭和5年頃とされる。国柱会の田中智学に傾倒し、賢治が東京へ出奔したのは大正10年1月下旬であったが、その智学への熱い思いは1年で霧消した。その年の8月11日付関徳弥宛書簡では「私の感情があまり冬のやうな具合になってしまつて燃えるやうな生理的感情なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では一人の心をも理解し兼ねると思つて」3週間ちょっと肉食したと記されている³⁰⁾。

(新校本全集の「年譜」で推察されているように、この「一人」の代表はおそらく保阪嘉内であろう)。彼は「豚の脂」も食べた。賢治は3年半続いたベジタリアンの生活を一時中断したのである。書簡の裏側には芝居(「[蒼冷と純黒]」)が記されていて、その文中には「俺は豚の脂を食べやうと思ふ。俺の胸よ。強くなれ。お里の知れた少しの涙でしめされるな。

強くなれ」という「純黒」の言葉も見える³¹⁾。『フランドン農学校の豚』はこのあとに書き始められた。とすれば、どうやらこの物語は、人はベジタリアンでなければならないという揺らがぬ信念にもとづいて、肉食放棄を訴えた作品ではないことになる。豚の脂を食べるかどうかよりもっと大事なことは、人間の心、「一人の心」を理解することである。賢治が心を砕いていたのは「ニンゲンと非ニンゲンの対等を夢見る理想主義」以上に、人間同士一ひいては生き物同士の相互理解であったのではないか。西成彦の文章で言えば、「豚にまで要求した」という言葉の内にも見られる、他の動物とも対等とは認められない豚の置かれた地位の低さこそが問題なのである。

加えて言えば、「豚にまで」死亡承諾書を要求したのは王であって、賢治ではない。王が何がしかの慈悲心を起こし、「家畜撲殺同意調印法」を布告したことは疑いないが、その慈悲心は賢治のものではない。

この法律は、「ニンゲンと非ニンゲン」の「対等」（平等）を目指しているのではない。殺す側か殺される側か、どちらの側に回るかわからない小十郎と熊の関係ならばいざしらず、一方的に殺される側にしか立てない家畜と人間には「対等」の関係はありえない。この法律は対等ではなく家畜の自由、わけても意志の自由を保障しようとしている。しかし、生きることを希求するものとしなないものを想定しているのは、奇妙である。いるはずのない生きたくないものを想定しているのは、食用として人間に役立つことに誇りを感じている家畜がきつというはずだ、という王の身勝手な憶測によるものだろう。そしてそのような憶測を事実だと認定すれば、この法律は王の思惑を離れて独り歩きを始める。この法律は最初から、強いられた自己犠牲の物語を作りだす可能性を秘めている。

権力の頂点に立つ王はのんきである。善意にもとづく命令を出せば、善意の結果が得られると単純に考えている。絶対的な権力者が命令したのだから、家畜の意志はきちんと確かめられると信じている。悪用を防ぐために、死亡承諾書には「家畜の調印を要する」と注記することも忘れなかった。念には念をといるところだろうが、王自身は自分の命令が実行されているかどうか、それを確かめるために一つひとつの書類に目を通すことは

ないだろう。宰相かだれか、高位にいる部下の報告を受けるだけである。その部下はさらにその下の部下の報告を受けるだけである……。要は最終的に、下位の役人に王の命令はその通りに実行されていますと、「爪印」付の書面で証明できれば、それでいいのだ。問題はこの書面の作成にある。たとえ死にたくない拒否しても、脅迫であれ何であれ、＜人間に恩を感じ、死をもって奉仕する家畜＞を演出した書面に当人の爪印があれば、同意したものと認めるということである。たとえ何千、何万の家畜を殺したとしても、書面上の不備さえなければ、みな自らの意思で死を選びました、で事は終わる。

フランドン農学校の校長たちは、王の布告を受け、次のような文案の同意書を作成した。「私儀永々御恩顧の次第に有之候儘、御都合により、何時にても死亡仕るべく候、…」文面を考えた（あるいは承諾した）校長も、豚の＜立場＞に立って考え、「恩顧」など、じっさいは豚が私的に感じなければならないことを、なりかわって＜察している＞ように見せかけているが、このなりかわりはしかしながら、自分たちの利益を引き出すための策略でしかない。「御都合により、何時でも」という表現はいかにもヘンだ。

しかしいかにヘンであっても、豚は押印を拒みとおすことはできなかった。育ててもらった恩を返せと強い語調で脅迫されると、豚は恐怖のあまり、ついには泣きながら印を押してしまう。このような死を強制される苦しみを味わったのは、フランドンの豚だけではない。「その頃は、牛でも馬でも、もうみんな、殺される前日には、主人から無理に強いられて、証文にペタリと印を押した」という語り手の回想から、豚の運命は他の家畜たちの運命と重なっていたことがわかる。

しかしながら、「人間語」を習得し、流暢にそれを操ることができるようになった豚ヨークシャイヤにはさらに、他の家畜たちとは違う＜彼＞特有の精神的苦しみがあった³²⁾。

たとえば校長は＜やさしく＞豚に語りかける。「とにかくよくやすんでおいで。あんまり動きまはらんでね」と。これは表面的には、豚の不安を和らげるための労わりの言葉であるが、人間である我々読者には、食べ物として価値を下げないようにという校長の思惑が透けて見える。「人間語」に

通じた豚は我々ほどではないにしろ、やはり、この校長の言葉のニュアンスを薄々感じとることができたのだ。だからこそ豚は不安に駆られ、「一体これはどう云ふ事か。ああつらいつらい」と煩悶する。また、校長は、死を受け入れるように次のように説得した。「実はね、この世界に生きてるものは、みな死ななけあいかんのだ。実際もうどんなもんでも死ぬんだよ。人間の中の貴族でも、金持でも、又私のやうな、中産階級でも、それからごくつまらない乞食でもね。「馬でも、牛でも、鶏でも、なまずでも、バクテリアでも、みんな死ななけあならないのだ。蜉蝣のごときはあしたに生れ、夕に死する、たゞ一日の命なのだ。みんな死ななけあならないのだ。だからお前も私もいつか、きっと死ぬのにきまつてる」。どうせ死ななければならぬのだから、「その死ぬときはもう潔く、いつでも死にますと斯う云ふことで、一向何でもないことさ」と、校長は押印を迫る。「何でもない」ことはない。自由意志に裏打ちされた＜私は潔く死にます＞と、自由意志を強要する＜おまえは潔く死んでくれ＞の間にはおそろしい落差がある。人間には生存の自由がある。生きていたいと思う人間は、死なずに自分の意志で生きてゆく自由がある。豚ヨークシャイヤもまた、＜人間＞としての自由を願う。しかしその一方で、「人間語」を獲得したヨークシャイヤは人間の倫理を血肉化し、恩に報いたい、潔くありたいとも思っていたにちがいない。こうして自由と倫理の間で板挟みにされた豚は、精神的に引き裂かれた状態に追い込まれる。

豚を追い込む校長の言葉が、いかにけれんに満ちたものか。それは、『なめとこ山の熊』の小十郎の言葉と比べてみればよくわかる。たとえば、追い詰められ、鉄砲をつきつけられた熊が両手をあげ、「おまへは何がほしくておれを殺すんだ」と小十郎に向かって叫んだ時、小十郎はまっすぐにこう答えた。「あゝ、おれはお前の毛皮と、胆のほかにはなんにもいらぬ。それも町へ持って行ってひどく高く売れると云ふのではないしほんたうに気の毒だけれどもやっぱり仕方ない。けれどもお前に今ごろそんなことを云はれるともうおれなどは何か栗かしだのみでも食つてゐてそれで死ぬならおれも死んでもいゝやうな気がするよ³³⁾」。熊はこの言葉の真実を信じる。だからこそ熊は、し残した仕事をするために2年、殺すのを待ってく

れと頼むことができたし、別れ際も、いきなり背後から鉄砲で撃たれることなど決してないことを確信し、「うしろも見ないでゆっくりゆっくり歩いて行」くことができた³⁴⁾。もしも小十郎がここで、あきらめろ、「みんな死ななけあならないのだ」から「潔く」死んでくれ、などと言って熊を諭そうとしたら、熊は怒って飛びかかってきただろう。小十郎も校長も、相手を殺害しようとする事には変わりはないが、小十郎の言葉が、ありのままの心情を真摯に語る言葉であるのに対し、校長の言葉は何かを当て込んだ「底意のある」＜真摯な＞言葉である。

校長は、相手の立場に立ったなりかわりの言葉を巧妙に偽造している。「戦争は人口過剰の結果その調節として常に起るものに御座候」と言った大正7年の賢治の言葉が、ここでも思い起こされる。校長は言わば、マルサス的な立場に立って、自然の摂理に従う者として死にゆく者を一般化し、一括りにするのである。死は「常に起るもの」であるとし、校長は自身もいずれ死にゆく者の一人であることを告げる。こうして彼は死のなんでもなさを強調し、死を潔く受け容れることを勧めるが、彼自身は死なずに生き続ける。これは、自分もつらいから相手もつらいだろうと単純に推し量る「子供の考」ではない。『注文の多い料理店』広告文の言葉を用いれば、それは、計算ずくの「卑怯な成人」の考えである。

死の前の平等を説く校長は明らかに、自身の言葉にある種のモルヒネの効果を期待している。たとえば、『白痴』のムイシュキンは、迫りくる死を思い、悩み苦しむイポリートに対して、「人より多く苦しむことができたとすれば、当然その人は、人より多く苦しむ値打ちのある人なんですよ³⁵⁾」と、あえて「書き方教本」から採ってきたような陳腐な言葉を口にする。いかにも安直な言葉で、同種の構文ならいくらでも作れそうだが、これはいわば言葉のモルヒネなのだ。モルヒネは病を治しはできないが、痛みを和らげることはできる。そして校長もまた、たしかに言葉のモルヒネで豚の苦痛を和らげようとしている。しかし、使い方に問題がある。「よくその人の声を聞け 偽の語をかぎつけよ³⁶⁾」（「農民芸術の興隆」）と賢治は呼びかけた。この場合「声」とは、話す時の目の動きや態度をも含むのだろう。また賢治はこうも言う。「いくら字を並べても心にないものはてんで音

の具合から違ふ。頭が痛くなる。同じ痛くなるにしても無用に痛くなる³⁷⁾。これは、「心にないもの」を書かないようにという自戒の念であると同時に、「心にないもの」を書いたり言ったりする者たちへの警戒の念を語ったものである。

「みんな死ななけあならないのだ。だからお前も私もいつか、きっと死ぬのにきまつてる」という校長の言葉自体は真理であり、使い方、状況によっては、避けがたい死が間近に迫った者へのやさしい慰めの言葉ともなる可能性がある。しかし実際に使われた校長の言葉は、ムイシュキンの使う言葉のモルヒネではない。『白痴』の語り手の言葉を用いて言えば、ムイシュキンは、「内容は空虚でも」ある種の言葉が追い詰められた立場にある人たちの「魂を捕え、鎮める」ことを本能的に洞察していた³⁸⁾。校長とは違い、ムイシュキンにはたとえ安直な言葉、あるいは嘘の言葉であっても、それによって相手のつらさを消し去ろうという思いがあった。校長にとっては、豚のつらさは頭では分かるが、それ以上のものではない。おそらく根は善良なのだろうが、彼は、トップとしての責任を果たせないのかという下からの突き上げを気にし、自身のメンツを保つことに汲々としている。豚をかわいそうだと思ってはいても、同時にそのかわいそうな者の死を望んでいる。

尊敬する<えらい>人の偽りの言葉が、鞭の暴力と同じくらい、あるいはそれ以上に豚の「魂」を苛む。この偽りの言葉こそが、豚の味わう「苦の世界」の苦をさらに増幅させる元凶となる。結果的に、豚は人間不信になり、最期まで、つらいつらいとこぼしながら、ほとんど無抵抗のまま、死を受け容れざるをえなかった。

昭和2年の詩「生徒諸君に寄せる」の中で賢治は、「諸君はこの時代に強ひられ率ゐられて／奴隷のやうに忍従することを欲するか」と生徒たちに勇ましく呼びかけている³⁹⁾が、<人間>に敵愾心を抱くキャリバンならばいざしらず、フランドンの豚の場合、あえて「忍従」を拒むとすれば、もはや逃亡しかない。おそらく賢治は、苛立つ思いで、その可能性を考えたことがあるのではないか。文語詩「退耕」で逃亡する豚が登場するのも、豚ヨークシャイヤの無念さと無関係ではあるまい⁴⁰⁾。

5.

「以外の物質は、みなすべて、よくこれを摂取して、脂肪若しくは蛋白質となし、その体内に蓄積す。』」－『フランドン農学校の豚』は、こんな中途半端な文章から始まる。新校本全集ではわざわざ本文冒頭に「冒頭原稿何枚か破棄」と編者が記しているが、天沢退二郎の指摘するように、いらぬお節介で、これが、本来の始まり方なのだろう⁴¹⁾。岡澤敏男はこのカットされた文章を「畜産教科書の一節で豚の食性（雑食性）を説明する部分」であったとして、そのおおよそのところを『養畜論』という明治期の畜産書によって復元してみせた⁴²⁾が、なくても簡単に想像できる内容である。逆に言えば、読者には想像によって作者の言わんとするところを復元するように任されているのである。これは広く世界文学に照らし合わせれば、ロレンス・スターンが『トリストラム・シャンディ』（1759-1767年）において用いた＜シャンディズム＞と呼ばれる手法である。＜シャンディズム＞の特徴は、なにより読者が作品世界に積極的に参加し、語り手（あるいは作者）との共同作業を受け持つ点にある。『トリストラム・シャンディ』の主人公兼語り手であるトリストラムは、ページを空白にしたり、真黒に塗りつぶしたり、アステリスクで悩ましたり、話の調子を急変させたり、時間を逆に進めたりと、読者の想像力が忙しく働くようにしておくために労を惜しまない⁴³⁾。ゴーゴリや宇野浩二も同種の手法を用いている。ゴーゴリでは、さあ面白い話に続きは「次章を読めばわかりますよ」、で終る人を喰ったような尻切れとんぼの小説（『イワン・フョードロヴィチ・シポーニカとその叔母さん』）もある。宇野浩二の『蔵の中』は、「そして私は質屋に行こうと思い立ちました」と、奇妙なことに、話の途中から話が始まる。

『フランドン農学校の豚』では、終わり方にも＜シャンディズム＞の特徴が見られる。賢治は、屠殺された豚を助手がまさに解体しようとしたところで話を中断し、一転、次のようなまったく調子の異なる一節を付け加えた。

「さて大学生諸君その晩空はよく晴れて金牛宮もきらめき出し二十四日の銀の角、つめたく光る弦月が、青じろい水銀のひかりを、そこらの雲にそゝぎかけ そのつめたい白い雪の中 戦場の墓地のやうに積みあげられた雪の底に豚はきれいに洗はれて、八きれになって埋まった。月はだまって過ぎて行く。夜はいよいよ冴えたのだ」

いったいこの急激な変調の意味はどこにあるのか。賢治はこの思いがけない一節で、読者に何を訴えかけようとしたのか。

小沢俊郎はこの「詩情に富んだ描写」を取り上げ、ここには社会批判的なものも宗教的ゆるしもなく、「賢治の立場のあいまいさ」が露呈していると指摘した⁴⁴⁾。押野武志はこれに反論して言う。「人間たちに対する批判〔なぜ肉食するのか〕が感情論を一步も出ない以上、豚を救うには、このような美学化しかなかったはずである⁴⁵⁾」と。

押野が何より問題とするのは、語り手が、豚の最期に立ち会いながら、豚がじっと動かなくなったあとのことを、それ以上は「もう私は知らない」と言ったことだ。氏によれば、賢治はこうして「知らない」はずの他者の死を、救いという名のもとに「美学化」してしまい、結果的に、＜美しい＞「自己犠牲という〔危うい〕観念」を引き寄せる⁴⁶⁾ことになる。

私に言わせれば、語り手の「知らない」のは死そのものではなく、死後のことである。語り手は「他者の死」を突き放し、わりきっているわけではない。語り手がなりかわるのは生きている豚だけである。『なめとこ山の熊』の小十郎も、青い星のようなものを見て、これは「死んだしるし」だ、「死ぬときに見る火だ」と思ったが、「それからあとの小十郎の心持」については語り手は「もう私にはわからない」と言う。ここでも語り手は、死後のことはわからないと言っているだけである。『よだかの星』のよだかは死後、星になったが、これは語りのルールが違う。ここでの語り手は＜お話＞を淡々と事実を事実のままに語るだけで、なりかわって想像するわけではない。それはいわば「風が運んできた」話、すでにできあがった話である。

豚を救うという視点に立てば、この一節は『二十六夜』の終わり方と似

ている。

運悪く人間の子どもにつかまった梟の子、穂吉は、紐につながれ、おもちゃ代わりにされ、ついには足をへし折られて放り出される。そして最後は、とてつもない痛みに苦しみながら死ぬ。梟の坊さんは、＜法＞を説くが、穂吉の痛みはどうすることもできない。坊さんに言えるのは「この世の罪も数知らず、さきの世の罪も数かぎりない事ぢやほどに、この災難もあるのぢやと、よくあきらめて⁴⁷⁾」嘆かないようにすべし、という言葉だけだ。まさに大人への＜教え＞である。しかし穂吉にはこの大人のための言葉は役に立たない。説教によって救われたいという思いがあったのかどうかも疑わしい。「[ものが言えなくなっているが] それでもどうしても、今夜のお説教を聴聞いたしたいといふやうでございましたので」と母親は言うが、これは、説教を聴聞してほしいという母親自身の願望である。同じように、父親は「斯んな〔尊い〕お話を伝へ聞いたら、もう死んでもよいと申しますでございませう」と推察する。物語の中に現れるのは、こうあってほしいと願う親の考えだけで、ほんとうの穂吉の心のうちは伝えられない。たしかなことは、穂吉は痛みがあまりにもひどかったから、その痛みから逃れるためには死んでもいいと考えていたことだけだ。彼は痛みで泣いていた。死の直前、「お月さまの船の尖った右のへさきから、まるで花火のやうに美しい紫いろのけむりのやうなものが、ばりばりばりと噴き出」て、捨身菩薩たちが現れた。かすかな笑いを浮かべたのは、捨身菩薩たちの力が働いた、宿業の罪があるとはいえ、「幼い子供は子供であるがゆえに救われる」のだと、解釈をすることもできる⁴⁸⁾。おそらくそのように読まれることを予測して、「余りにセンチメンタル」「どうも／くすぐったし」と賢治は表紙余白に書き記したのだろう。『フランドン農学校の豚』の最後の詩情も、もしもこれで豚が救われるとしたら、センチメンタルでくすぐったいものになる⁴⁹⁾。

一方で、最後の穂吉のかすかな笑いはまた、捨身仏たちの出現とは関係なく、死が到来した瞬間、痛みから解放されたからだとリアルに解釈をすることもできる。少なくとも、賢治は物語の中では、これが真実だ、というような説明を加えていない。ただ言えることは、いずれにせよ、苦しみ

からの解放は、死と引き換えでなければ得られないということだけだ。

このような穂吉の最期を重ね合わせて豚の最後を彩る美文を読むと、苦しみからの解放を歌い上げているだけのようにも見える。しかしそれは、あくまで〈読者〉を抜きにしての話である。

この美文で綴られた風景は、豚の末期の目に映ったものではない。一節の前には、「豚はすぐあとで、からだを八つに分解されて、厩舎のうしろに積み上げられた。雪の中に一晚漬けられた」とある。そのあとに賢治が書き加えた文章でも、豚が雪の中に八つに分解されたことが再度伝えられている。というより、それ以上の事実は何も新たに伝えられていない。加わったのは月の描写や、「戦場の墓地のやうに積み上げられた」雪、「夜は冴えた」といった表現で醸し出される美しい詩情でしかない。

これは、豚を救うための美文ではない。そもそもなぜ肉食するのかなどという「人間たちに対する批判」はここにはない。すでに触れたように、「俺は豚の脂を食べやうと思ふ⁵⁰⁾」と記し、実際に豚を食べたのはこの物語に取り組む前年のことである（『ビヂテリアン大祭』も、肉食賛成派の演説がみんなやらせであったというその煤けた終わり方を見れば、ベジタリアンを称揚する物語とはとても思えない）。小沢の言う社会批判的なものか、宗教に徹してゆるすものか、という選択の強要も奇妙である。ちっぽけなものにこれ以上の抵抗は考えられない。もし強く抵抗するなら、その場合はちっぽけな人間でなくなり、まったく別の物語になる。また、豚には梟たち（『二十六夜』）のような罪は出てこないのだから、ゆるしも悔悟もあるはずがない。美文は立場の「あいまいさ」を示すものではない。

何よりも注意したいのは、この言葉が豚ではなく「大学生諸君」に向けられているということだ。これまでも聴き手に対しては、「(大学生諸君、意志を鞏固にもち給へ)」、「どうもいやな説教で、折角洗礼を受けた、大学生諸君にすまないが少しこらえてくれ給へ」、「ウルトラ大学生諸君⁵¹⁾、こんな〔鞭で追われるような〕散歩が何で面白いだらう」と、呼びかけてきた。いずれの場合も、人間の残酷な振舞に言及されている時に呼びかけられている。とすれば、語り手はここでも、豚の屠殺の残酷さに、大学生たちがショックを受けないように配慮していることになる。

しかし、語り手は作者ではない。我々は語り手の声を通して、自分たちに呼びかける賢治の声を聞く必要がある。

この詩的律動性をもつ美文は、聴き手、ひいては読者に一つの^ま間、読者を瞑目させる澄んだ時間を提供する。そしてそのような例は、ゴーゴリの『イワン・イワーノヴィチとイワン・ニキーフォロヴィチが喧嘩をした話』にもある。ここでの語り手はテンション高く、おもしろおかしく俗悪な出来事を語り進めてくるのだが、数年後、まだ同じことを繰り返す人々をもう一度振り返る時点で調子が急変し、「諸君、この世はわびしいね」で物語は終わる。この「わびしい *скучно*」という一語で、滑稽な馬鹿話が気の重い、真剣な話に一変したように、「月はだまって過ぎて行く。夜はいよいよ冴えたのだ」という詩的な結びで豚の話全体が変調する。スイッチが切り換わったのだ。

聴き手は大学生であるが、同時に我々読者でもある。豚が殺される直前、自らの一生を振り返ったように、我々ももう一度、別な視点から、滑稽で哀れな豚の<人生>を、自分たちと同じ人生として、別な色調で反芻するのである。小沢俊郎は、賢治はこの豚の死の中に「生者必滅」の「大きな宇宙法」を見ているのではないかと推察した⁵²⁾が、そのような「宇宙法」はすでに、バクテリアや自身を例にとって、校長によっても説かれていた。この最後の一節は校長の美文に相対するもう一つの<美文>である。『外套』の言葉を用いて言えば、バクテリアや蜚蜉だけでなく、「この世の皇帝たち、支配者たちを襲った不幸」と同じ不幸に見舞われた豚の<人間>としてのつらさ、その重さを我々は感じとらなければならないのではないか。律動的美文は、「苦の世界」の特異な反芻（共同作業）を促す読者への呼びかけであった。

注

¹⁾ 『新校本宮澤賢治全集』第15巻・本文篇、筑摩書房、1995年、228頁。

²⁾ 大正7年、3月10日付、宮沢政次郎宛書簡。『新校本宮澤賢治全集』第15巻・本文篇、53頁。

- 3) 『新校本宮澤賢治全集』第15巻・本文篇、50頁。強調は筆者、以下同じ。
- 4) 大正13年の「北いっぱい星空に」(異稿)を参照(『新校本宮澤賢治全集』第3巻・校異篇、263頁)。
- 5) 大正7年2月23日付、宮沢政次郎宛書簡。『新校本宮澤賢治全集』第15巻・本文篇、50頁。
- 6) 『新校本宮澤賢治全集』第16巻上、補遺・資料篇、284頁。
- 7) 『新校本宮澤賢治全集』第15巻・本文篇、69頁。
- 8) 同上、70頁。大正10年1月、出京の前の手紙には、「憐れな衆生を救はうではありませんか」という保阪への呼びかけもある(『新校本宮澤賢治全集』第15巻・本文篇、201頁)。
- 9) 『芥川龍之介全集』第1巻、筑摩書房、昭和46年、57頁。
- 10) 『新校本宮澤賢治全集』第10巻・本文篇、323頁。同全集では標題は正確には『〔フランドン農学校の豚〕』となっているが、ここでは〔 〕は外した。以下、『フランドン農学校の豚』からの本文引用はすべて、同全集、同巻322頁～337頁に拠る。物語からの引用の頁数は煩瑣を避けるために省略する。
- 11) Гоголь Н.В. Полн. собр. соч. в 14 томах. Т.3. АН СССР. М.-Л., 1938. Стр.162.
- 12) 『新校本宮澤賢治全集』第9巻・本文篇、213-214頁。のちに、「畜産組合」その他のアンチ・ベジタリアンたちの行動、発言はすべて「芝居」であったことが判明する。
- 13) 同上、212頁を参照。
- 14) 同上、214頁。
- 15) 『新校本宮澤賢治全集』第15巻・本文篇57頁。同種のことは、大正7年2月23日付宮沢政次郎宛書簡でも語っている(「戦争とか病気とか学校も家も雪もみな均しき一心の現象に御座候」一同上、50頁)。
- 16) 『新校本宮澤賢治全集』第10巻・本文篇、264頁。
- 17) 『宮沢賢治 銀河系のセロイスト』冬樹社、1973年、36-37頁。
- 18) 『新校本宮澤賢治全集』第13巻上・本文篇、539頁。
- 19) 「黄昏」は以下の通り。「花さけるねむの林を、／さうさうと身もかはたれつ、／声ほそく唱歌うたひて、／屠殺士の加吉さまよふ。／／いづくよりか鳥の尾ばね、／ひるがへりさと堕ちくれば、／黄なる雲いまはたえずと、オクターヴォしりぞきうたふ」(『新校本宮澤賢治全集』第7巻・本文篇、140頁)。
- 20) 小沢俊郎「つらい『豚』の話」—続橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成』第19巻、日本図書センター、1992年、所収、277頁。岩屋に閉じ込められた孤独な山椒魚を井伏自身ととれば、小沢の指摘は、おそらく『山椒魚』(昭和4年)にも適用できるだろう。ちなみに、『山椒魚』の元になった『幽閉』(大正12年)では、誇張はほとんどない。
- 21) 「諸君」への呼びかけなどを含む誇張は『山椒魚』にも見られる。おそらく井伏もまた、ゴーゴリ、宇野浩二の文体の流れを汲んでいるのだろう。
- 22) ゴーゴリと宇野に関する詳細は、拙稿「ゴーゴリと日本文学—〈嘘〉を学ぶ」(原暉之編『講座スラブの世界8 スラブと日本』弘文堂、1995年、所収)を参照されたい。
- 23) 本橋哲也訳『テンペスト』インスクリプト、2007年、180-181頁。
- 24) 西成彦『新編 森のゲリラ 宮澤賢治』平凡社、2004年、60頁。
- 25) 岡澤敏男「『フランドン農学校の豚』のリアリティ」(『國文學 解釋と鑑賞』1巻1号、學燈社、1936年6月)、158頁。

- 26) 栗原敦『〔フランドン農学校の豚〕考』（『作品論 宮沢賢治』双文社出版、1984年、所収）、61頁を参照。
- 27) 『新校本宮澤賢治全集』第9巻・本文篇、213頁。
- 28) 同上、209頁。
- 29) 『新編 森のゲリラ 宮澤賢治』、61頁。
- 30) 『新校本宮澤賢治全集』第15巻・本文篇、218頁。
- 31) 同上・校異篇、108頁。
- 32) 同意書に印を押した豚は心労で痩せてゆくが、農学校側としては、食肉として要をなさなくなつては困るので、豚を太らせるために、強制飼育器でむりやり食物を胃に流し込む。残酷さは際立っている。しかしそれはあくまで、他の家畜たちにも共通する身体的な無理強いによるものである。
- 33) 『新校本宮澤賢治全集』第10巻・本文篇、269頁。
- 34) 同上、270頁。
- 35) Достоевский Ф.М. Полн. собр. соч. в 30 томах. Т.8. Л., Наука, 1973. Стр.432.
- 36) 『新校本宮澤賢治全集』第13巻上・本文篇、18頁。
- 37) 大正10年7月13日付の関徳弥宛書簡。『新校本宮澤賢治全集』第15巻・本文篇、217頁。
- 38) Достоевский Ф.М. Полн. собр. соч. в 30 томах. Т.8. Стр.404を参照。
- 39) 『新校本宮澤賢治全集』第4巻・本文篇、298頁。
- 40) 「ものなべてうち訝しみ、こゑ粗き朋らとありて、／黄の上着ちぎるゝまゝに、
栗の花降りそめにけり。／／演奏会せんとリサイケルのしらせ、いでなんにはや身ふさはず、／
豚はも金毛となりて、はてしらず西日に駈ける」（『新校本宮澤賢治全集』第7巻・本文篇86頁）。「豚」はやりきれない思いを抱く賢治自身である。もはやくこんなところを逃げ出したいという切実な思いが、金毛となって遁走する豚の姿に重ねられている。ちなみに、文語詩「巨豚」でも、「巨豚ヨークシャ」が金毛になって逃げている。
- 41) 『《宮沢賢治》のさらなる彼方を求めて』筑摩書房、2009年、141-142頁。現存第一葉欄外余白への「寓話集中」などの書き込みから判断して、その記入時点ですでに第一葉になっていたという天沢の推測は正しいと思う。
- 42) 『フランドン農学校の豚』のリアリティ」、157頁。
- 43) Peter Conrad. *Shandyism*. Basil Blackwell. Oxford. 1978. P.18を参照。
- 44) 「つらい『豚』の話」、276頁。
- 45) 押野武志『宮沢賢治の美学』翰林書房、2000年、272頁。
- 46) 同上。
- 47) 『新校本宮澤賢治全集』第9巻・本文篇、162頁。
- 48) 小埜裕二「二十六夜」（『國文學 解釈と教材の研究』、臨時増刊号「宮沢賢治の全童話を読む」、學燈社、2003年2月）、139頁。
- 49) 『ひかりの素足』草稿の表紙にも同じように、「余りにセンチメンタル／迎意的なり」というメモ書きがあるが、賢治はここでも、安易な宗教的救いによる読者受けを懸念していたと思われる。
- 50) 『新校本宮澤賢治全集』第15巻・校異篇、108頁。
- 51) この呼びかけは初期原稿にはない。昭和5年頃、最後の一節とともに書き加えられたものだろう。「ウルトラ」に関しては、昭和6年発行の酒尾達人編「ウルトラ モダン辞典」（一誠社、34頁）「ウルトラ」の項目にこうある。「超」ーウルトラ・モ

ダンと言へば超近代的、ウルトラ・モガと言へば超近代的少女。近代的より、更に一歩進んで新しい。「新進の」というぐらいの意味か。

⁵²⁾ 「つらい『豚』の話」、276 頁。